

平成 27 年度 文部科学省委託事業
発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業



発達障害の ライフデザイン支援 成果報告書



国立大学法人
愛知教育大学

Contents

目次

第1章 発達障害のライフデザイン支援とは 三谷聖也 	2
◆発達障害のライフデザイン支援 三谷聖也 	2
◆問題意識・提案理由・目的 三谷聖也 	2
第2章 主な取り組み内容とその成果	
◆通常の学級における特別支援教育の必修化にむけたニーズ調査と取り組み 三谷聖也 ...	4
◆卒前・修了前教育の取り組み 岩田吉生 	9
◆発達障害ライフデザイン支援プロジェクトの概要 三谷聖也 	12
◆発達障害の入口支援プロジェクトの概要 原田宗忠 	18
◆医教連携プロジェクトの概要 岩田吉生 	21
◆デザインのちからプロジェクト 三谷聖也 	24
◆その他の事業 三谷聖也 	27
◆その他の成果普及の取り組みー 2015年から2016年までー	30
第3章 今後の課題 三谷聖也 	32
参考資料	33
付記	40

発達障害の ライフデザイン支援とは

1 発達障害のライフデザイン支援

【テーマ】 発達障害支援に関する教育現場のニーズ調査を踏まえ、インクルーシブかつ負担の少ない発達障害児への支援モデルを発展させ、そのモデルに基づく発達障害児の理解および支援法を教育現場に導入していくための教職員育成プログラムの開発を行う。

本事業では、国際的なガイドラインで示されている「インクルーシブな社会を実現することによって教育システム全体のコストを削減する」という教育現場レベルでは一見矛盾すると思われる命題を解くべく、教育にデザインモデルという新たなパラダイムを導入することによってその実現を図っていくことを提案している。平成26年度のプロジェクトで取り組まれた理論研究で「発達障害ライフデザイン支援モデル」が提案されたが、これは、発達障害児者のライフ（いのち、生涯、生活、暮らし、人生、生きがい、活気）をめぐるさまざまな課題を乗り越えるべく、デザインの根本思想に基づく支援方法によって、デザイン要因と人的要因によるバリアを取り除いていくという合理的配慮とともに、社会における彼らの付加価値を発見していくプロセスとされる。このモデルは、エクスクルーシブ（排他的）からインクルーシブ（包含的）への方向性の支援に特徴的であり、また「補助線を一本引く」という語に象徴されるようなシンプルかつ十分な支援に特徴的であることから、インクルーシブな社会の実現および教育システム全体のコスト削減の両側面に資する可能性が期待されるものである。

平成27年度は教育現場でのニーズ調査を踏まえ、平成26年度に開発された同モデルを教育現場のニーズに応えつつ教育効果を高めるように改良を加え、それに基づくテキスト開発とその普及を行い、教員養成および現職教育の充実を目指していく。

2 問題意識・提案理由・目的

1. 問題意識

発達障害児への合理的配慮をすることが、現場において過度な負担と感じられてしまうという問題がある。一方でサランカ宣言では「インクルーシブな方向性を持つ通常の学校こそ、差別的な態度と戦い、友好的な地域社会を創り、インクルーシブな社会を建設し、万人のための教育を達成するためのもっとも効果的な手段である。さらに言えば、これらは、大多数の子供に効果的な教育をもたらすものであり、効率性を格段に上げ、究極的には教育システム全体のコスト削減につながる」とも明記されている。現場の意識と国際的

ガイドラインとの解離をどのように克服したらよいかを考えていく必要があるだろう。

2. 提案理由

本事業の提案理由は、通常の学級における特別支援教育を推進するためには、教職員が発達障害児を学級や学校にインクルードしていくという意識を持ち、彼らの特性を踏まえたライフデザイン支援の在り方を、教職員のニーズに沿った形でわかりやすく学ぶことができる教職員育成プログラムの開発およびその普及が必要であると考えからである。

目的1

発達障害に関する学びについての現職教員のニーズ調査を通して、本学における「通常学級における特別支援教育」のカリキュラムの必修化に向けて必要な教育内容を探ることを目的とする。

目的2

卒業修了前教育やアクティブ・ラーニング等での実践を通して、現行の教員養成段階の学生での学習機会の充実およびカリキュラムの整備に向けた課題を探ることを目的とする。

目的3

発達障害児・者の生涯発達各ステージについて予測しながら現段階としてどのような支援が可能かを考えるための研究会を開催し、発達障害支援における連携支援の充実策を検討し、教材開発につなげることを目的とする。

目的4

発達障害のグレーゾーンの児童生徒を適切な支援に結び付けるための入口支援についての研究会を開催し、スムーズな入口支援をサポートするための教材開発につなげることを目的とする。

目的5

医学と教育のいずれかではなく両者の有機的連携による医教連携支援の可能性について検討するための研究会を開催し、その結果を踏まえて教材開発につなげることを目的とする。

目的6

デザインや美術教育の発達障害支援への貢献可能性を探るための研究会を開催し、その結果を踏まえて教材開発につなげることを目的とする。

主な取り組み内容とその成果

1 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査と取り組み

教員養成段階

現職教員向け

1 取り組み内容

ア. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査

(ア) 目的

現職の教職員に通常の学級における特別支援教育が現時点でどの程度学ばれているのかについての実態調査を行うとともに、現在の教育現場からの声として、教員養成系大学のカリキュラムにどのような指導内容や指導方法を期待するかについてのニーズの調査を行うことを目的とする。加えて調査結果を踏まえ、通常の学級における特別支援教育に関する教職課程のカリキュラム整備に関する示唆を得ることを目的とする。

(イ) 調査時期

平成27年7月28日～平成27年10月18日

(ウ) 調査対象

愛知県総合教育センターで初任者研修、5年経験者研修、10年経験者研修を受講した愛知県内の教職員3,062名（有効回答者2,988名）

(工) 調査項目

所 属	幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校
性 別	男性、女性
教 員 歴	平成27年度末現在
教員免許	幼、小、中、高、特、養、栄、その他
免許教科	自由記述
特支免許	特支免許（無、盲、聾、知肢病）
通常の学級における特別支援教育に関する履修状況	全くない、数時間履修、30時間以上履修、必修として履修、特別支援コース等に在籍（複数回答可）
通常の学級における特別支援教育の指導経験	あり、なし
「特別支援教育に関する講義で役だったと思われる内容」	自由記述
通常の学級における特別支援教育の自信の度合い	自信がある、自信がない、まったく自信がない
通常の学級における特別支援教育に関して大学在学中に開講するとよいと思われる講義や実習について * 17項目の選択肢の選定にあたっては、バイアスを減じるべく、愛知県の教員養成に予備知識を持たない他県の教育系大学の研究者に項目作成を依頼	下記の17項目から5項目の選択回答 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 通常の学級における発達障害のある児童生徒の理解と支援 ▶ 視覚障害・聴覚障害・知的・肢体不自由・病弱児の理解と支援 ▶ 通常の学級における発達障害のある児童生徒の事例検討 ▶ 発達障害のある児童生徒に関するチーム支援、支援会議の持ち方 ▶ ユニバーサルデザイン（障害のある児童生徒に配慮した環境整備） ▶ 障害のある児童生徒の就学支援、進学支援、就職支援 ▶ 読書や絵本教材を用いた学習法 ▶ 施設等の見学や特別支援学級での実習 ▶ Q & A方式等の補助教材の活用 ▶ インクルーシブ教育等の障害に関するものの見方、考え方 ▶ 学級内での問題行動の対応 ▶ 学校内の連携支援のノウハウ ▶ 学外との連携（医療と教育の連携等） ▶ 映像教材やウェブサイト等を用いた学習方法 ▶ 障害の疑似体験を通じた学習 ▶ 学生自身が課題を見つけて学習するアクティブ・ラーニング ▶ その他

2 主な成果

ア. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査の結果の概要

Table1 教員歴と特別支援教育の受講時間

		全くない	数時間	30時間以上	必修	特別支援コース等	計
初任者	度数	271	421	34	305	40	1071
	%	25.3	39.31	3.17	28.48	3.73	100
	調整済残差	-12.99	4.33	3.71	9.94	-0.60	
5年経験者	度数	465	357	8	149	40	1019
	%	45.63	35.03	0.79	14.62	3.93	100
	調整済残差	4.48	0.59	-3.65	-4.67	-0.20	
10年経験者	度数	334	135	11	55	26	561
	%	59.54	24.06	1.96	9.80	4.63	100
	調整済残差	10.24	-5.89	0	-6.39	0.98	
合計	度数	1070	913	53	509	106	2651

P<.001

Table2 教員歴と発達障害のある児童生徒に対する指導経験

		なし	あり	計
初任者	度数	735	331	1066
	%	68.95	31.05	100
	調整済残差	13.46	-13.46	
5年経験者	度数	460	551	1011
	%	45.50	54.50	100
	調整済残差	-6.14	6.14	
10年経験者	度数	205	356	561
	%	36.54	63.46	100
	調整済残差	-8.84	8.84	
合計	度数	1400	1238	2638

P<.001

Table3 教員歴と発達障害のある児童生徒に対する指導の自信の度合い

		自信がある	自信がない	まったく自信がない	計
初任者	度数	94	729	243	1066
	%	8.82	68.39	22.80	100
	調整済残差	-5.67	0.75	5.44	
5年経験者	度数	145	693	173	1011
	%	14.34	68.55	17.11	100
	調整済残差	1.14	0.86	-2.02	
10年経験者	度数	114	360	87	561
	%	20.32	64.17	15.51	100
	調整済残差	5.7	-1.08	-3.48	
合計	度数	353	1782	503	2638

P<.001

Table4.教員歴とカリキュラム内容

		通常学級	他の障害	事例検討	チーム	ユニバーサル	進学就職	読書や絵本	施設などの見学	Q&A	インクルーシブ	学級内での	学校内の	学校外の連携	映像教材	障害の疑似体験	アクティビティ	その他	計
初任者	度数	860	361	694	253	452	284	192	332	56	213	701	262	214	106	245	94	9	5328
	%	16.14	6.78	13.03	4.75	8.48	5.33	3.60	6.23	1.05	4.00	13.16	4.92	4.02	1.99	4.60	1.76	0.17	100.00
	調整済残差	-1.73	-1.51	-2.45	-4.54	1.39	-3.08	3.33	2.68	1.01	5.81	0.69	-0.96	-2.84	4.28	4.37	2.24	0.42	
5年経験者	度数	871	380	738	327	407	313	146	266	49	95	659	260	237	60	174	69	4	5055
	%	17.23	7.52	14.60	6.47	8.05	6.19	2.89	5.26	0.97	1.88	13.04	5.14	4.69	1.19	3.44	1.36	0.08	100.00
	調整済残差	0.98	1.15	1.77	2.28	-0.11	0.30	-0.61	-1.26	0.20	-5.76	0.33	0.01	0.17	-1.98	-1.34	-0.85	-1.69	
10年経験者	度数	488	207	404	195	207	209	58	138	20	82	343	156	162	25	72	32	7	2805
	%	17.4	7.38	14.4	6.95	7.38	7.45	2.07	4.92	0.71	2.92	12.23	5.56	5.78	0.89	2.57	1.14	0.25	100.00
	調整済残差	0.91	0.44	0.83	2.73	-1.54	3.34	-3.27	-1.72	-1.45	-0.12	-1.22	1.14	3.20	-2.78	-3.65	-1.67	1.50	
合計	度数	2219	948	1836	775	1066	806	396	736	125	390	1703	678	613	191	491	195	20	13188
	%	17.40	7.38	14.40	6.95	7.38	7.45	2.07	4.92	0.71	2.92	12.23	5.56	5.78	0.89	2.57	1.14	0.25	100.00

P<.001

以上の調査結果から主要な結果を抽出すると以下のとおりである。

まず、「通常学級における特別支援教育」に関する講義の履修率は年々上がっているものの、履修経験が<全くない>と<数時間履修>と回答したものはいまだ全体の74.80%にのぼっていることが示された（Table1）。発達障害のある児童生徒への指導経験については教員歴10年経験者で63.46%と高い数値を示していたが（Table2）、追加的分析を行い、経験ありと回答した教員歴10年経験者について自信の度合いを調べたところ<自信あり>と回答したものは26.84%に留まっていた（Table3）。現職の教職員が大学カリキュラムで開講するとよいと回答した主な項目は、<通常の学級における発達障害のある児童生徒への理解と支援><通常の学級における発達障害のある児童生徒の事例検討><学級内での問題行動への対応>などであった（Table4）。

3 成果と有効性の評価

ア. 「通常の学級における特別支援教育」の必修化に向けたニーズ調査の結果についての考察

まず本調査で明らかになったことは、特別支援教育に関する教職課程における講義の履修率は年々増加しているとはいえ<全くない><数時間履修>と回答したものはいまだ全体の74.80%にのぼるということである。教育を起点としたインクルーシブな社会の実現のためには、教員養成段階の教職課程においてインクルーシブ教育を当たり前とする教職員の育成が求められるため、教員養成系大学での通常の学級における特別支援教育のカリキュラムの必修化が不可欠と言えるだろう。

必修化の課題としては、現場のニーズに即した教科内容を安定的に教えていくことが求められることから、教科書整備が不可欠であると言える。教科書整備にあたっては、本調査で明らかになった結果から「通常の学級における発達障害のある児童生徒の理解と支援」を学ぶ基本的内容をベースとしながら、「事例を通した学び」、そして5年経験者、10年経験者からの要望の高かった「連携支援」についてのノウハウを学ぶことのできる教材開発が求められると言えるだろう。

このように教科書整備等の含めた必修化の試みによってインクルーシブ教育の均霑化が図られるものと予想されるが、そもそも本調査で示された学習動機の低い項目を、現場に入る前の早期の段階で指導しても学生の興味関心にはつながらないものと言えるだろう。この点を確実なものとしていくためには、本調査で明らかになった「視覚教材の活用」や「体験学習」を取り入れていくことが不可欠であるといえる。

最後に今後のさらなるインクルーシブ教育の推進のためには、将来教員になっていく学生への指導だけでは網羅できるものではなく、既に現場で活躍している教職員への啓発も不可欠であると言えるだろう。しかしながらこれは大学教育だけでは達成可能なものではなく、教員養成系大学が教職員の研修機関と連携した研修活動の充実が求められる。本調査で測定したものは、現職の教員の教員養成系大学のカリキュラム

への期待であったが、現職の教員が大学教育に期待することは、現在の現職教員の教育現場における諸課題や学習動機を反映しているものと推察される。そのため、全教員が通常の学級における特別支援教育に関する基本的な理解や支援の共通理解を踏まえたうえで、下記のような経験年数に応じた研修内容の再充実化が求められると言えるだろう。まず初任者研修において開設が期待される研修内容は、視覚教材や体験的学習を通じた発達障害理解の推進である。5年経験者の段階では、「学内でのヨコの連携」のノウハウに関する研修の実施である。そして10年経験者研修では、「学内のヨコの連携」「学外とのヨコ連携」「タテの連携」に関する研修内容の充実である。

以上より、本調査によって「通常学級における特別支援教育」の必修化に向けて具体的なカリキュラム内容を整備するうえで、また現職教員の研修内容を検討していくうえで、貴重な示唆を得ることができたものと結論づけられる。

4 成果普及の取り組み

ア.論文発表

三谷聖也・松原正明・板倉憲政・三谷理絵 2016 通常の学級における特別支援教育に関するカリキュラム開発の課題と展望—現職教員への質問紙調査から—愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号

イ.ニーズ調査のエビデンスに基づいた教材開発とその成果普及

ニーズ調査のエビデンスを踏まえて平成26年度に取り組んだ研究成果を発展させ下記の教材の刊行およびウェブサイトの充実化に取り組んだ。

- (ア) 発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕
- (イ) 発達障害のライフデザイン支援〔事例篇〕
- (ウ) 発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕
- (エ) 教職員のための発達障害Q & A—教えてはじめ先生—
- (オ) 不登校と発達障害の理解と支援—ライフデザイン支援シートの活用
- (カ) ウェブサイトの充実化

<http://www.rinsho-center.aichi-edu.ac.jp/project/project3/index.html>

ウ. 本学大学改革、大学院改革への成果還元

本調査で得られた成果を還元し、新教養科目の新設や新課程のカリキュラム整備等を進めている。

2 卒前・修了前教育の取り組み

教員養成段階

1 取り組み内容

ア. 卒前・修了前教育の取り組み

現在、小中学校・高校では、通常の学級で学ぶ発達障害児の指導・支援の在り方が検討され、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を習得することが求められている。しかしながら、愛知教育大学の教員養成課程に関わるカリキュラムでは、特別支援教育の講義が必修化されておらず、教職科目の一部で取り扱われる他、E選の選択科目として開講されているのみの現状が続いている。

そこで、来春3月に本学を卒業または修了する学生を対象として、発達障害に関する専門性を目指した研修会を開催する。発達障害の概要を学ぶだけでなく、通常の学級での授業作りや教室の環境設備、現職教員の教育実践等、4月からの教育実践に役立つ知識を提供する。

日 時 | 平成27年12月5日 (土)

場 所 | 愛知教育大学・本部棟・3階・第1会議室

対 象 | 愛知教育大学学部生・大学院生

出席者 | 70名 | 内訳 | 本学教員2名、本学事務職員4名、大学院生および学部生60名、現職教員4名 |

講 師 | 神田正美先生 (愛知県総合教育センター・相談部・部長)

岩田吉生 (愛知教育大学 障害児教育講座 准教授)

川崎真帆先生 (豊田市立東山小学校・教諭)

紺田直子先生 (東郷町立東郷中学校・教諭)

小林大輔先生 (名古屋市立長良中学校・教諭)

コーディネーター | 岩田吉生 (愛知教育大学障害児教育講座 准教授)

運 営 | 愛知教育大学 研究連携課

2 主な成果と有効性の評価

ア. 研修会の概要

○「小中学校のユニバーサルデザインを目指した学級作り」

神田正美先生 (愛知県総合教育センター・相談部・部長)

小中学校では、各学級において、教室環境の整備、学習環境の整備、個の違いを認め合う学級集団作りを念頭に置いた上で、ユニバーサルデザインの学級経営と授業の

検討がなされるようになってきている。しかしながら、通常の学級において、ユニバーサルデザインを考慮した教育実践を行うことは、教員の特別支援教育に関する知識・経験や問題意識等によって差がある。また教員の負担感を増大させることになりかねない。ユニバーサルデザインの授業の教育実践を推進させるためには、様々な支援内容における教員の実践のしやすさ（難易度）、支援の必要性（優先度）等を考慮しなければ、すべての教員にこの理念が浸透していかない可能性がある。

今回の研修会では、小中学校の通常の学級に在籍する障害のある子供の実態や様々な問題行動の概要と、これらの課題に対して教員がどのように対応し、学級経営や授業作りを行っているかについて、説明があった。参加学生は、実際の教育実践の具体的な手立てについて整理する機会を作ることができた。

○「発達障害児の疑似体験」

岩田吉生（愛知教育大学 障害児教育講座 准教授）

発達障害児の疑似体験の学びとして、幾つか教材を用意して、参加学生に体験させた。発達障害児の読み書きの困難さ、ワーキングメモリーの制限、視野が限定される環境、騒音化の聴覚理解、指先が不器用さ等、疑似体験の機会を作り、子供の障害の特性や学習の困難さを実感する機会を与えることができた。

○「小中学校の教員からのアドバイスー通常の学級に在籍する発達障害児の支援と、特別支援学級の児童生徒との交流のヒントー」

川崎真帆先生（豊田市立東山小学校・教諭）

紺田直子先生（東郷町立東郷中学校・教諭）

小林大輔先生（名古屋市立長良中学校・教諭）

来春、教員となる学生たちに、「教員となる上での心構え」について現職教員からアドバイスをいただいた。そして、始業式までに進めるべき業務として、前年度の教員からの引き継ぎ、年間計画の作成、授業の時間割の作成、教室環境の整備、クラスのルールの検討等について説明がなされた。その後で、小学校の通常の学級と中学校の通常の学級の学級経営の在り方、特別支援学級の児童生徒の交流教育に関して、指導上のポイントの説明があった。また、子供の問題場面を想定した上での対処法を皆で話し合う時間を設ける等、実践的な内容の説明があった。

障害の診断の有無に係わらず、子供の学びや成長が促されるように、教員は子供一人ひとりを見つめ、指導・支援することが重要であることを、3名の現職教員から学ぶことができた。

イ. アンケート内容および結果の概要

本研修会の事後アンケートに関して、参加者70名のうち、すべての受講者が、「たいへん有意義な研修会であった」または「有意義な研修会であった」という回答をしていた。

また、「卒前・修了教育」の研修会に参加した学生の自由記述の感想には、「通常の学級における発達障害児の指導についてイメージができた」「発達障害児の子供の指導の基本を理解することができた」「もっと長い時間、話を聞きたかった」「教員になる不安が解消された」等の前向きな意見が記述されていた。

以上の学生の事後アンケートから、本研修会が、卒業前・修了前の学生にとって、有意義であったものとなったことがわかった。

3 成果普及の取り組み

本学における特別支援教育の関連科目の開講は、選択科目としてしか開講していない。そのため、意識の高い学生は、特別支援教育の関連科目を履修し、専門性を高めているに過ぎない。次年度以降も、選択科目の特別支援教育の講義を開講する中で、その内容を充実させていくこととともに、全学開講の必修化した特別支援教育の講義の開講に向けて検討を進めるべきである。そして、大学院・専攻科・学部において、教員免許を取得するすべての学生が、特別支援教育の専門性を身に付けていくカリキュラム実践活動等を整備していくことが急務の課題となる。

尚、本学では、学内で、2年後に全学開講の必修化した特別支援教育の講義を開講することで進めている。本プロジェクトの本研修会で得られた学生たちの声や研修のノウハウを活用していきたいと考える。

3 発達障害ライフデザイン支援プロジェクトの概要

現職教員向け

1 取り組み内容

各地域で発達支援を牽引していくことが求められるミドルリーダー的な教職員には、発達障害児者の生涯発達の各ステージについて予測しながらの幼小中高大社の連携の中での現段階における支援が求められる。また各学校段階における取り組みや支援が連続性のあるものの一環としての妥当性を振り返り、支援を途切れさせないための方策はどのようなものであるかを学ぶ力が求められる。そこで発達障害のライフデザイン支援とりわけ「タテの連携」に関する現職の教職員の課題を抽出すること、および円滑な方法論を構築する必要性から、多方面の専門家からの話題提供で構成されるシンポジウムを2回シリーズで実施した。第一回では、参加者から「タテの連携」に関する課題や取り組みに関する実践知の集約を中心に、第二回は、タテの連携上の医療・福祉・教育の観点を踏まえた研究会での学びの集約を目的に研究会を実施した。

ア. シンポジウム「発達障害におけるタテの連携を考える」の実施

日 時 | 平成27年8月2日（日）

場 所 | 愛知教育大学 教育未来館3階 多目的室

対 象 | 教職員、教育関係者・スクールカウンセラー

出席者 | 92名 | 内訳 | 参加者73名、本学教員7名、本学事務職員4名、大学院生8名 |

参加者 | **板倉憲政**：岐阜大学教育学部 助教

高綱睦美：愛知教育大学学校教育講座 講師

立松容子：愛知県立瑞陵高等学校 教諭

松原正明：愛知県総合教育センター相談部 教育相談研究室 室長

コメンテーター | **吉岡恒生**：愛知教育大学 障害児教育講座 教授

司 会 | **三谷聖也**：愛知教育大学教育臨床学講座 准教授

イ. 研究会「発達障害におけるタテの連携を考えるⅡ

—高大社の連携を中心に—の実施

日 時 | 平成27年11月29日（日）

場 所 | 名古屋国際会議場 1号館 133・134会議室

対 象 | 教職員、教育関係者・スクールカウンセラー

出席者 | 56名 | 内訳 | 参加者44名、本学教員2名、本学事務職員3名、大学院生7名 |

講師 | 岩田吉生：愛知教育大学障害児教育講座 准教授

上西 創：東北工業大学ウェルネスセンター 臨床心理士

古橋直幸：はしたにクリニック 臨床心理士

鹿野義人：社会福祉法人豊寿会あいそら羽島 サービス管理責任者

司 会 | 三谷聖也：愛知教育大学教育臨床学講座 准教授

2 主な成果と有効性の評価

ア.シンポジウム「発達障害におけるタテの連携を考える」の成果

(ア) シンポジストにより提供された話題の概要

○「小1プロブレムと中1ギャップへの予防的アプローチ」

板倉憲政先生（岐阜大学教育学部 助教）

小1プロブレム・中1ギャップに関する研究・支援経験を通じたタテの連携上の課題が話された。各校での発達障害支援や連携への懸命な努力の反面、対応や連携者・保護者の情報等、伝達される情報の乏しさや一方向性、伴う悪循環の存在が指摘された。幼・小の子供同士の交流による予防的効果や可能性についても説明された。

○「小学校からのキャリア教育」

高綱睦美先生（愛知教育大学学校教育講座 講師）

「キャリア教育」導入の背景、タテの連携が目指されてきた経緯、複数市における先駆的な取り組みの紹介がされた。子供たちが将来、社会とのかかわりで求められる汎用的な力や資質に着目した長期的な視点での小学校段階からの「キャリア教育」の意義が説明された。学校段階を越えた一続きの発達支援を想定し、各段階での教育目標設定に重要であることから、発達障害支援におけるタテの連携の考察に示唆が与えられた。

○「中高大連携の課題と取り組み」

立松容子先生（愛知県立瑞陵高等学校 教諭）

高等学校における特別支援教育推進上の課題について話題提供された。通学・履修・人間関係・教員との距離などの変化に伴う「高1クライシス」現象の生じやすさ、発達障害のある生徒のこの体験の大きさなどが指摘され、ガイダンスの充実・合格発表日からの連携・中高の連絡会や研修会の設立などが提案された。大学との連携に関しても、円滑なタテの連携への可能性に関する具体例が提案された。

○「ライフデザイン支援シートの開発と今後の展望」

松原正明先生（愛知県総合教育センター相談部 教育相談研究室長）

不登校と発達障害の関連に関する研究の副産物として開発された「ライフデザイン支援シート」の意図や意義について説明された。これは教員同士の連携必然性の自覚や参加意識の喚起、会議の過程・見立てや方針・役割分担といった支援の設計図の可視化のメリットなどが考慮され、デザインに工夫が凝らされたもので、タテの連携への活用可能性も提案された。

イ. アンケート内容および結果の概要

シンポジウム参加者を対象に、目的を事前の開催案内、および当日口頭にて説明し、以下の内容について質問紙調査を実施した（回収率80.2%（65/81））。

〈質問内容および結果の概要〉

(ア) 属性（職業・年齢・性別）

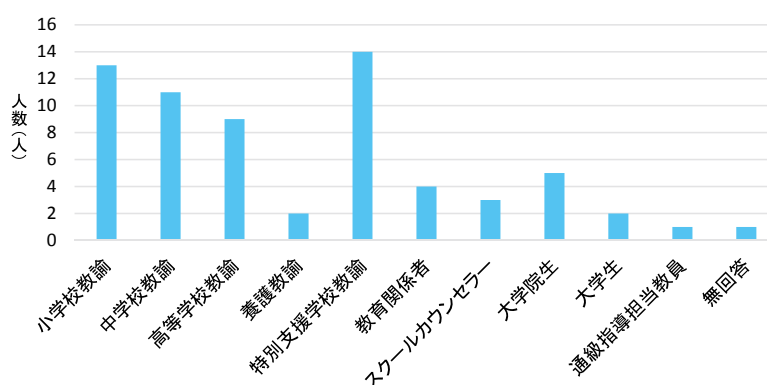


図1 アンケート回答者内訳(職業別)

(イ) シンポジウムを通じた「タテの連携の必要性」の理解の程度

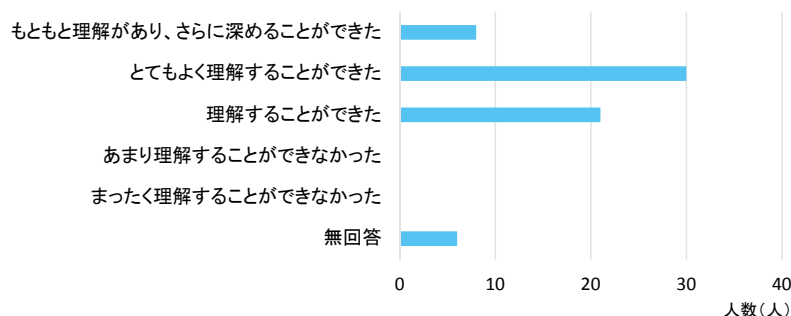


図2 「タテの連携」の必要性の理解が得られた程度

(ウ) 発達障害支援における「タテの連携」に向けて、学校にあると考える課題

- 守秘義務・個人情報保護
- 入試への影響への懸念等に伴う情報の限定
- 発達障害および支援における教員間の理解
- 認識の違い・温度差、学校間での文化差
- 個別の指導計画・個別の教育支援計画の活用・具体策の引き継ぎ

- 情報交換の機会・システムの乏しさ
- 教員の多忙さ、教員数の少なさ、異動や担任変更、窓口の曖昧さ、コーディネーター・管理職の力量等

(エ) 発達障害支援における「タテの連携」に向けて現在取り組んでいる内容や工夫等

- 個別の支援計画の活用
- 情報交換会・連絡会
- 教員や管理職による学校間訪問・見学・授業参観
- 行事や部活動を通じた児童・生徒間交流、保護者の学校見学、中高一貫校や特別支援学校での円滑さ
- 関係機関の医師・心理士・保護者等を通じた情報共有、研修を通じた学校間の理解、日常的な情報交換

(オ) その他、感想等

- 支援の継続性や一貫性の重要性・校種を越えた連携の重要性を感じた。
- 環境・社会づくりの必要性等を改めて感じた。
- ライフデザイン支援シートの具体的な活用法や事例を通しての理解が得られた、活用したい。
- 「タテの連携」の円滑化にはすべての教員の知識・理解が重要。養成段階の教育課程の工夫に期待する。
- 異なる立場の講師より様々な視点が得られた。課題は多いが、できることを見つけていきたい、努めたい。

ウ.研究会「発達障害におけるタテの連携を考えるⅡ

—高大社連携を中心に—の成果

(ア) 基調講演の概要

○「発達障害支援における高大社の連携—特別支援教育の視点から—」

岩田吉生先生（愛知教育大学障害児教育講座 准教授）

発達障害はその診断の確定自体が重要ではないことを前提に、福祉手帳の取得や機関連携によって、生き方の選択肢が広がることなどが説明された。また、就労の現状や課題、大学での障害学生支援の実際、本人・保護者の障害受容や就労への動機づけの重要性、就労で求められる具体的なスキルを幼少期から高める必然性、時間をかけて「依存的な自立」を目指すことの重要性などが指摘された。

(イ) 実践報告の概要

○「学生相談の実践」

上西創先生（東北工業大学ウェルネスセンター 臨床心理士）

発達障害のある人が、発達特性にどのようなデザインバリアがあることに伴って生きにくさを抱くのか、そのバリアを探って支援する視点が報告された。そして、大学生の学業や就労、二次障害予防に向けた具体的な実践に関して、教員・外部機関やピア・サポーターなどとの連携例などが紹介された。

○「クリニックにおけるリワーク支援の実践」

古橋直幸先生（はしたにクリニック 臨床心理士）

障害者職業センターとの連携の中でのクリニックのデイケアにおける取り組みが、具体例を通して報告された。障害者手帳取得による就労の選択肢の拡大、本人の障害理解と支援者・職場側の歩み寄りによる安定した長期就労に向けた支援などの話題に加えて、発達障害者の個性的な適応努力に焦点を当てた介入の具体例などが紹介された。

○「障害者福祉の実践」

鹿野義人先生（社会福祉法人豊寿会あいそら羽島サービス 管理責任者）

障害者総合福祉施設における相談支援事業所および「計画相談」の位置づけや、本人の希望を尊重した伴走型の自立支援の実践例などが話された。そして、様々な障害福祉サービスの選択肢があり、その人の障害特性に合ったサービスや事業所を見つけるための、事業所や相談支援専門員とつながりをもつことの必要性などが報告された。

エ. アンケート内容および結果の概要

シンポジウム参加者を対象に、目的を事前の開催案内、および当日口頭にて説明し、以下の内容について質問紙調査を実施した（回収率80.0%（35/44））。

〈質問内容および結果の概要〉

(ア) 属性（職業・年齢・性別）

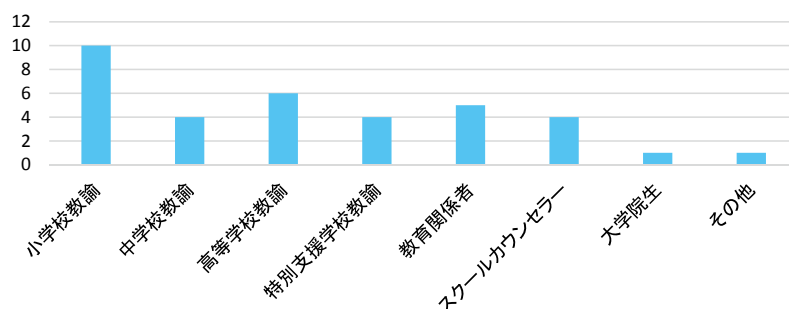


図3 アンケート回答者内訳(職業別)(Ⅱ)

(イ) 研究会を通した「タテの連携の必要性」の理解の程度

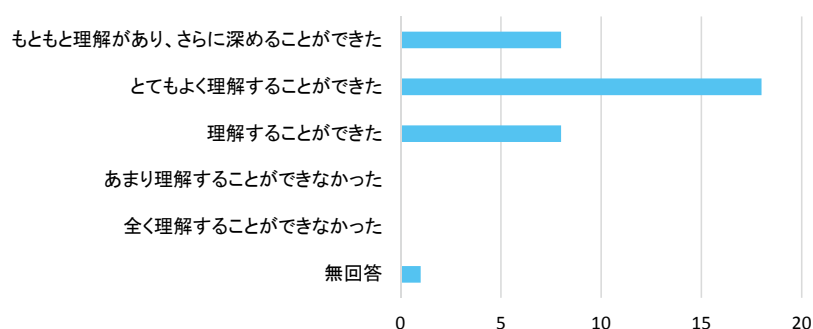


図4 タテの連携の必要性の理解が得られた程度(Ⅱ)

(ウ) 研究会を通して、教育・医療・福祉の視点から考えたこと

- 将来の選択肢・医療・福祉の現場の支援や連携上の仕組み・機関を知ることの重要性
- 義務教育段階における生き方・就労・依存的な社会自立を目指した支援の重要性・大学での発達障害学生の支援に対する期待

(エ) 研究会を通して、将来を見据えた在学中の支援について考えたこと

- 就労に求められる力を早期から身に付ける重要性、早い段階で選択肢を本人・保護者に提示する必要性
- 将来の生活、働くこと、収入を得ること、依存的な自立につながる教育の必要性
- 教員免許をとる大学生の教育に対する意見

(オ) その他、発達障害支援における「タテの連携」に関する考え

- 幼保のあり方が「タテの連携」の視点をもつことによって変化する可能性
- 年齢ごとに必要な支援上のタテの連携の重要性・将来を意識しながら、その場での指導をする重要性の認識
- 障害の定義や法制度などの情報を得る研究会、他職種が集う場の必要性の再認識

3 成果普及の取り組み

ア. テキストの刊行

講演内容を基に演者に原稿執筆依頼をし、前述の「発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕」および「発達障害のライフデザイン支援〔事例篇〕」を刊行し、包括協定を締結している各市教育局経由で管轄する各校をはじめ、全国の主要な研究機関や教育機関等への成果普及を行なった。

イ. 愛知教育大学ウェブサイトへの掲載

研修終了後に、研修の概要をイベント報告として愛知教育大学のウェブサイトに掲載して情報公開を行なった。

4 発達障害の入口支援推進プロジェクトの概要

教員養成段階

現職教員向け

1 取り組み内容

ア. 講演会「発達障害について学ぶー発達障害の子供の自己をどのように支えるかー」の実施

「発達障害のグレーゾーン」にいる児童生徒に対する入口支援を適切に行うためには、発達障害における認知機能の状態、心理的状态の見立て、児童生徒および保護者が直面する心理的テーマ、それらを踏まえた具体的な支援方法を理解する必要がある。教職員がこれらを学ぶ機会として講演会を実施した。同時に、昨年度に実施した調査結果の報告を通して成果普及を図った。そして、講演会・研究調査報告を通じた参加者の実践知の振り返りや課題発見を目的に、アンケート調査を実施した。

日 時 | 平成27年8月23日 (日)

場 所 | 豊川市勤労福祉会館 大研修ホール

対 象 | 教職員、教育関係者・スクールカウンセラー

出席者 | 61名 | 内訳 | 参加者51名、本学教員1名、本学事務職員4名、大学院生5名 |

講 師 | 野口寿一：島根大学教育学部 心理・発達臨床講座 講師

原田宗忠：愛知教育大学 教育臨床学講座 講師

2 主な成果と有効性の評価

ア. 講演の概要

「発達障害について学ぶー発達障害の子供の自己をどのように支えるかー」

野口寿一先生（島根大学教育学部 心理・発達臨床講座 講師）

情報の少なさを主観的な想像力で補って状況を理解しようとする人間の傾向、認知特性によって注意が向く情報の範囲が狭くなってしまうタイプの発達障害傾向などの説明、先行研究の紹介等を通して、発達障害傾向のある方の適応への努力や苦勞、他者との間で感じる異質感や苦しみなどを講演された。最後に、発達障害の傾向のある方を支える際の①他者・世界との接点を支える、②「自己」の芯へのまなざし、という2つの視点が教示された。

イ. 研究調査報告

原田宗忠講師（愛知教育大学 教育臨床学講座）より以下2点の調査結果概要の報告および課題提起がされた。

- (ア) 発達障害の可能性のある児童・発達障害の入口支援時の教員の関わりの実態把握を目的としたアンケート調査報告
- (イ) 医療機関と学校との間でどのような連携があるとよいかを医療機関側の視点から把握することを目的としたインタビュー調査報告

ウ. アンケート内容および結果の概要

講演会参加者を対象に、目的を事前の開催案内、および当日口頭にて説明し、以下の内容について質問紙調査を実施した（回収率75.0%）。

〈質問内容および結果の概要〉

(ア) 属性（職業・年齢・性別）

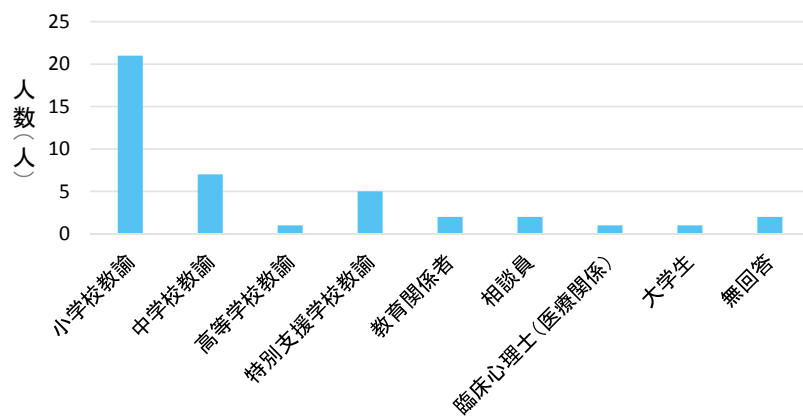


図5 アンケート回答者内訳(職業別)(Ⅲ)

(イ) 講演会に関する満足度

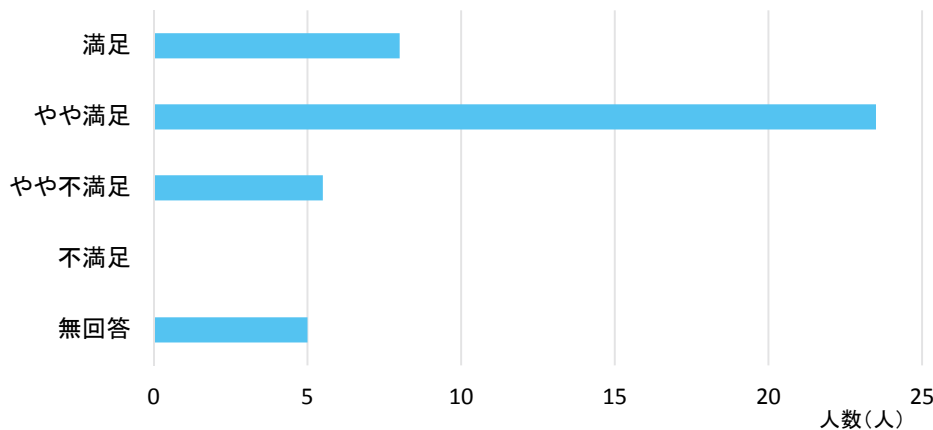


図6 参加者の満足度

(ウ) 講演会を通して感じたこと・考えたこと・学んだこと・気づいたこと等

- ・児童生徒の心の世界を新たな視点で捉えなおすことができた。発達障害のある子供の特徴として挙げられることが、なぜ起こっているのかがわかった。今、関わっている子供たちの姿・様子を浮かべながら学ぶことができた。
- ・グレーゾーンの傾向にある人の、感じ方や苦しみなどを理解する機会となった。関わる者の葛藤も自覚した。
- ・子供の努力、保護者の思いを理解し、少しでも周囲の大人との間でつないでい

く役割をできるようにになりたい。

- 入口支援における配慮の必要性を理解した。保護者の揺れ、心のペースに配慮せず、教師・学校側のペースで短期間で推し進めようとしていることに気づいた。長期的な支援になるという視野をもった関わりが必要と感じた。
- 調査報告された他校の実践方法や、連携における医療機関側の視点が参考になった。

3 成果普及の取り組み

ア. テキストの刊行

講演内容を基に演者である野口寿一講師、原田宗忠講師に原稿執筆依頼をし、前掲の「発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕」「発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕」を刊行し、包括協定を締結している各市教育委員会をはじめ、全国の主要な研究機関や教育機関等への成果普及を行なった。

イ. ガイドブックの配布

発達障害の入口支援時に教職員が保護者や児童生徒にどのように関わればよいか、教室環境をどのように整えればよいか、校内連携をどのように行えばよいかについてまとめたガイドブックを『発達障害の入口支援―学校における実践の一助として―』として作成し、包括協定を締結している各市教育委員会経由で管轄する各校に、および愛知県総合教育センターに配布した。

ウ. 論文発表

発達障害の可能性のある児童・生徒の入口支援の開始時に教師が保護者とどのように関わっているかという実態調査を、588名に行い、その結果を「発達障害の可能性のある児童・生徒の入口支援時における教師の関わり―保護者との関わりに焦点をあてて―」（愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号 印刷中）としてまとめた。

エ. 各種研修会における普及

2015年7月28日実施の豊川市教育委員会支援員対象研修会、2015年8月28日実施の名古屋市教育センターH27年度10年経験者研修会、2015年9月4日実施の豊川市教育委員会支援員対象研修会等の各種研修会において、発達障害の可能性のある児童・生徒の入口支援の開始時に教職員が保護者とどのように関わればよいかについて講義、研修を行った。

5 医教連携プロジェクトの概要

教員養成段階

現職教員向け

1 取り組み内容

ア. フォーラム「教員養成大学の学生のための医教連携による『発達障害児者の医療』の実施」

現在、小中学校・高校では、通常の学級で学ぶ発達障害児の指導・支援の在り方が検討され、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を習得することが求められている。教員が学ぶべき領域は、特別支援教育にかかわる教育学や心理学のほか、医学の知識も必要不可欠である。すべての教員が発達障害に関する専門的・実践的な知識を有する教職員を育成するプログラムを開発するために、平成27年3月に藤田保健衛生大学と本学が協定を結び、連携して共同研究を進めている。

今回のフォーラムでは、本学の学生を対象として、藤田保健衛生大学の医師・臨床心理士の3名の講師から、発達障害児者の診療の実際、幼少期から青年期・成人期の問題、服薬の効果と管理の在り方、医師・臨床心理士が学校の先生に求めたいこと等の話題提供をする。

日 時 | 平成27年12月19日（土）

場 所 | 愛知教育大学・本部棟・3階・第5会議室

対 象 | 愛知教育大学学部生・大学院生

出席者 | 38名 | 内訳 | 本学教員6名、本学事務職員2名、大学院生および学部生27名、現職教員3名 |

講 師 | 石原尚子先生（藤田保健衛生大学病院・小児科・医師）

江崎幸生先生（藤田保健衛生大学病院・精神科・医師）

北島智子先生（藤田保健衛生大学病院・精神科・臨床心理士）

コーディネーター | 岩田吉生：愛知教育大学障害児教育講座 准教授

運 営 | 愛知教育大学 研究連携課

2 主な成果と有効性の評価

ア. 研修会の概要

○「小児科外来における発達障害児の診療の実際」

石原尚子先生（藤田保健衛生大学病院・小児科・医師）

小児科外来での発達障害児の診療の実際について、概要を説明された他、病院の医師と子供・保護者との係わり、そして、学校との連携の在り方に関する提言をい

ただいた。

○「思春期・青年期の発達障害者の医療」

江崎幸生先生（藤田保健衛生大学病院・精神科・医師）

精神科での発達障害のある青年の診療の実際について、概要を説明された他、病院の医師と当事者と家族との係わり、そして、学校・社会との連携の在り方に関する提言をいただいた。

○「発達障害者に対する心理臨床」

北島智子先生（藤田保健衛生大学病院・精神科・臨床心理士）

精神科での診療を受診しながら、臨床心理士によるカウンセリングを受ける発達障害のある青年を事例に取り上げ、医療機関における心理臨床の実際に関する報告をいただいた。

イ. アンケート内容および結果の概要

本研修会の講師の先生方の話題提供を踏まえ、質疑・応答の時間を設けた。その際に、会場からの質問を受け、講師の先生方からの回答をいただいた。本研修会の学生である参加者と講師との熱心な意見交換が重ねられ、発達障害児や障害が疑われる子供の幼少期から青年期までを通して、一貫した指導支援の重要性を再認識する機会となった。

参加者の事後アンケートでは、「発達障害児の医療の理解を深めることができた」「臨床心理士のカウンセリングの目的とその効用について理解ができた」「障害のある子供を指導する上で、医学的知識の重要性について再認識した」「医療機関と学校との連携が必要であることがよくわかった」「他の学生たちにもこのような話を聞く機会を作る必要がある」等の研修会の内容に関する肯定的な意見が90%以上となった。しかし、10%程度の学生からは「内容が専門的過ぎてわからない点が多かった」という意見もあった。

今回の研修を踏まえて、今後も学生が発達障害児の医療を学ぶ機会を作っていくことのほか、発達障害児の事例検討を中心とした、より実践的な研修会の開催を模索していきたい。

3 成果普及の取り組み

ア. 藤田保健衛生大学との大学間連携協定の締結による成果普及の促進

愛知教育大学と藤田保健衛生大学は、昨年度末の平成27年3月20日（金）に大学間連携の協定を結んだ。大学間の研究交流を進めるほか、その成果を教育現場に提供

していく取り組みを今後も継続していきたい。特に、発達障害児の教育支援の充実については、現在の教育現場では、いじめ・不登校問題とともに大きな課題となっているため、大学の学生の教員養成とともに、地域の学校の教員の専門性向上のための研修の場の提供を重ねていきたいと考えている。

イ. テキストの刊行

講演内容を基に演者である石原尚子医師、江崎幸生医師、北島智子臨床心理士に原稿執筆依頼をし、前掲の「発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕」を刊行し、包括協定を締結している教育委員会をはじめ主要な教育関係機関等に成果普及を行った。

6 デザインのちからプロジェクト

教員養成段階

1 取り組み内容

ア. 研究会「デザインのちからと特別支援教育」の実施

視覚優位の発達特性のある児童生徒に対して「見える化」（視覚化支援）を意識したデザインを工夫することは、特性のある児童に限らずすべての児童生徒にもわかりやすいものとなるため、デザインの持つちからによる児童生徒の自立支援の模索はインクルーシブ教育の実現に有効であると考えられる。この度は、豊明市教育委員会の小崎真指導主事を講師に迎え、美術教育、美術教員が持つ専門性が発達障害支援領域にどのように貢献できるかを検討する研究会を開催した。研究会に先立ち、平成27年10月30日に、愛知県美術館で行われたアートナビという視覚障害者への美術ナビゲーションのイベントに、小崎講師および三谷聖也准教授、大学院生3名が参加し、視覚芸術を言語化すること、言語を視覚化することの循環運動について課題の検討を行なった。本研究会はそのイベントの体験を踏まえて構成されたものである。

日 時 | 平成27年12月24日（木）

場 所 | 愛知教育大学 教育未来館 3B 講義室

対 象 | 愛知教育大学学部生・大学院生

参加学生 | 21名 | 内訳 | 本学教職員3名・大学院生・14名・内地留学生3名・修了生1名 |

講 師 | 小崎 真：豊明市教育委員会 指導主事

司 会 | 三谷聖也：愛知教育大学教育臨床学講座 准教授

2 主な成果と有効性の評価

ア. 研究会の概要

○「視覚支援に関する一考察 視覚芸術の視点から」

小崎真先生（豊明市教育委員会 指導主事）

視覚障害者の美術鑑賞に関して、疑似体験や愛知県美術館でのワークショップの紹介、文献などを通して、「落とし穴」を含めた「視覚化」支援についての講演がされた。すなわち、視覚障害者は美術鑑賞をする際、触覚や聴覚などに加えて、ソーシャル・ビュー（言葉を道具に他人の目で見ることと、その他人と体験を共有すること）を通して鑑賞することなどが伝えられた。そして、それを支援する人と支援される人との、「特別視」でも「対等な関係」でもない、共同作業を通じた「揺れ動く関係」や、支

援される人から学ぶ視点、支援される人の楽しみを奪わないことの大切さなども指摘された。また、発達障害のある人の「視覚映像優位型」と「聴覚言語優位型」の違い、それに基づいた教育のポイントなどについても説明された。そして、批判的思考をもちながら、支援を少しずつフェードアウトし、自己肯定感を高めながら自分でできることを多くしていくことの重要性についてなども講じられた。

イ. アンケート内容および結果の概要

〈質問内容および結果の概要〉

(ア) インクルーシブ教育における「デザインのちから」の必要性理解度

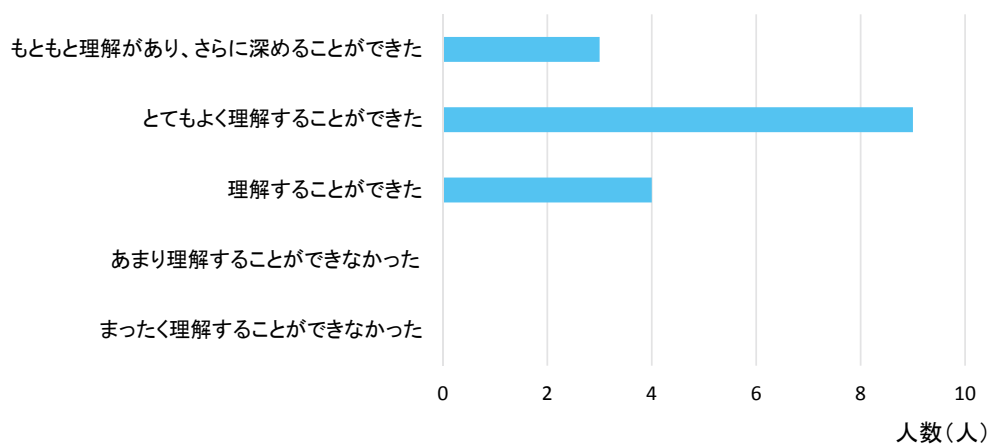


図7 「デザインのちから」の必要性の理解の程度

(イ) インクルーシブ教育における「美術（デザインの専門性）」の発達障害支援への貢献可能性について

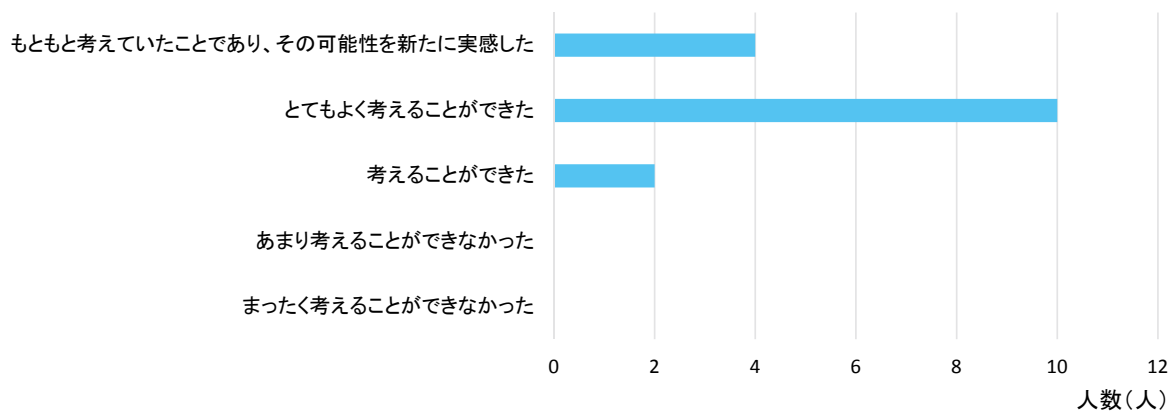


図8 「美術(デザインの専門性)」の発達障害支援への貢献可能性について考えた程度

(ウ) その他、研究会での学び・感想など

〈支援・視覚支援・障害者支援に関して〉

- 障害者支援というと、支援する側とされる側に上下関係ができてしまいがちであるが、「見えないこと」など、特性を通じた世界の在り方に学ぶという考えが勉強になった。
- 「支援する」という一方的な関わりをするのではなく、一緒に考えたり、楽しんだりすること、被支援者と支援者との「揺れ動く関係」が大切であることに気づくことができた。
- 発達障害の支援における「視覚支援」に関するこれまでの知識やイメージがとても浅く偏ったものであると感じさせられた。
- 困り感のある子の支援ばかりに焦点をあてるのではなく、その子がどんな世界を見て、生活しているのかを体験することが大切ということが、心に残った。
- 障害者本人が「ユーモア」と捉えている楽しみを奪わない支援のあり方を考えさせられた。

〈見えない人と見える人との美術鑑賞の疑似体験に関して〉

- 美術鑑賞の体験においては、視覚がないからこそ感じる驚きは新鮮だった。
- 言語で表現することの難しさを感じた。言葉にして伝えることの大切さを胸に刻み、目の前の子供と関わっていけるようにしたいと思った。

3 成果普及の取り組み

ア. テキストの刊行

講演内容を基に演者である小崎真氏に原稿執筆依頼をし、前掲の「発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕」を刊行し、包括協定を締結している各市教育委員会をはじめ、全国の主要な研究機関や教育機関等への成果普及を行なった。

7 その他の事業

教員養成段階

1 取り組み内容

ア. 「臨床教育カフェ」特別企画「教室で使える！発達障害入門」の実施

本学では、学部学生と大学院生のアクティブ・ラーニングによる学習会を、「教育臨床カフェ」として定期的に実施している。この機会および方法を用いて、発達障害の可能性のある児童生徒支援を学ぶために特別企画「教室で使える！発達障害入門」を実施することとした。将来、教員として学校運営をするにあたり、みずから課題を見つけて学習をするアクティブ・ラーニングの手法に慣れ親しんでおくことは大変有益であると思われる。今回の企画もアクティブ・ラーニングによる学びの一環であり、講師招聘から事前準備、当日の運営に至るまで、本学の大学院生と学部生の主体的な取り組みによって企画運営がなされた。

日 時 | 平成27年11月11日（水）

場 所 | 愛知教育大学 教育未来館 多目的ホール

対 象 | 教愛知教育大学学部生・大学院生

出席者 | 43名 | 内訳 | 本学教員4名、本学事務職員2名、大学院生および学部生37名 |

講 師 | 飯塚一裕講師（愛知教育大学障害児教育講座 講師）

運 営 | 愛知教育大学大学院教育臨床学講座大学院生・SOBA所属学生

2 主な成果と有効性の評価

ア. 「臨床教育カフェ」の成果について

（ア）講演の概要

飯塚一裕講師（愛知教育大学障害児教育講座 講師）より、発達障害支援法の背景や医学的診断名との関連の概略と、自閉症スペクトラム障害・LD・ADHDの可能性のある児童生徒の特性などの基礎的知識に関する説明がされた。それぞれの障害における行動・認知・感覚の特性、二次障害の可能性などについて、事例や疑似体験を交えての講演が実施された。

（イ）グループディスカッション

運営に携わった大学院生・学部生らが、事前討議により準備した提示方法によっ

て、「ある担任による児童生徒の話」が事例として提示され、担任の立場での対応に関するグループディスカッションが行なわれた。そこでは、提示された事例の情報の少なさから、幅広い視点での議論が展開された。すなわち、発達障害の可能性だけでなく他の可能性も念頭におきながら、児童の状況について他教員・保護者などからより詳しく情報を得たり本人や級友の思いを理解したりした上で、適切な対応を考える必要性などが議論された。

イ. 「臨床教育カフェ」のアンケート内容及び結果の概要

(ア) 講演の内容

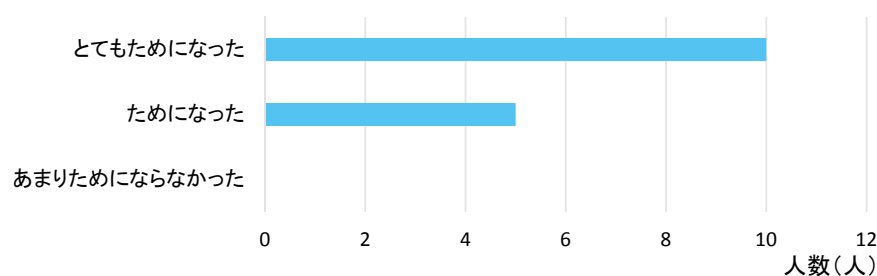


図9 講演の内容

(イ) ディスカッションの長さ

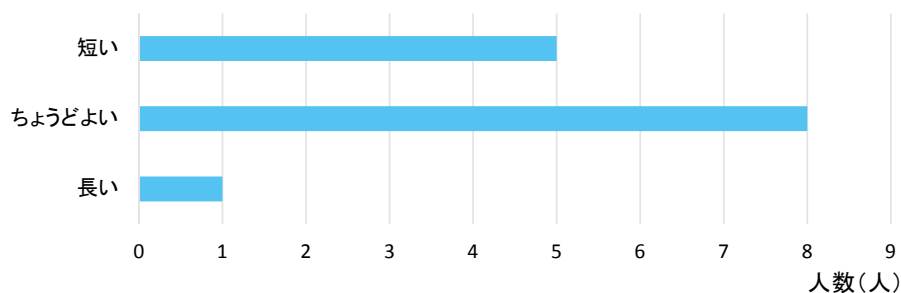


図10 ディスカッションの長さ

(ウ) ディスカッションの内容

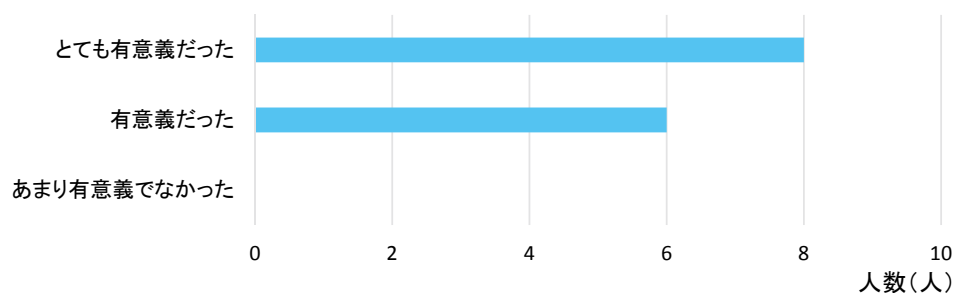


図11 ディスカッションの内容

(エ) 感想等

〈講演について〉

- 疑似体験を通して、学習の困難さを知ることができた。
- 発達障害をもつ子へのアプローチの方法や支援の仕方を具体的にきくことができ、

参考になった。

- 特徴や対応について障害別に丁寧に解説していただき、勉強になった。
- 発達障害についての知識を整理することができた。理解を深めることができた。
- 授業で少し学んだことを、より深く学ぶことができた。
- 発達障害の子が具体的にどういうときに不安になるのかを考えられた
- 本人の状況を理解し肯定しながら適切な対処を考えることが必要だと思った。

〈ディスカッションについて〉

- 具体的な事例をもとにどう対応するか話し合え、いろんな意見をきくことができて良かった。
- 実習に行かれた院生のお話など普段なかなかきけないような話を通じて、事例について考えることができた。
- 専攻や学科を越えて話し合うことができ、よい経験となった。

〈その他〉

- 実習先の子供の手立てを考える機会となった。
- 広い視野をもち、学校などで子供が生活しやすいように対応していきたい。
- 子供の状態について、いろいろな要因を考えることが大切であり、そのためには、まだまだ知識不足であることを痛感した。
- またぜひ参加したい。

3 成果普及の取り組み

ア. テキストの刊行

講演内容を基に演者である飯塚一裕講師に原稿執筆依頼をし、前述の「発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕」を刊行し、包括協定を締結している各市教育委員会をはじめ、全国の主要な研究機関や教育機関等への成果普及を行なった。

8 その他の成果普及の取り組み

—2015年から2016年まで—

1 著書・論文等

- 三谷聖也 2015 発達障害ライフデザイン支援モデルの開発—インクルーシブ教育の推進と教育現場における効率性に関する一考察—愛知淑徳大学教志会研究年報（創刊号）pp189-202
- 三谷聖也 2016 発達障害とライフデザイン支援 家族心理学年報第34号 印刷中
- 三谷聖也・松原正明・板倉憲政・三谷理絵 2016 通常の学級における特別支援教育に関するカリキュラム開発の課題と展望—現職教員への質問紙調査から—愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号 印刷中
- 三谷理絵・三谷聖也・布柴靖枝・上西創 2016 ライフデザイン支援モデルに基づく発達障害の疑似体験プログラムの有効性に関する研究 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号 印刷中
- 板倉憲政・三谷聖也・畦地真太郎・小林謙一・平井美津枝 2016 持続可能なコミュニティ形成に向けたライフデザイン支援 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学), 64(2) 印刷中
- 板倉憲政・三谷聖也・渡辺瑞紀 2016 幼稚園教員を対象にした小1プロブレムへの対応に関する基礎調査 岐阜大学教育学部研究報告(教師教育研究), 12 印刷中
- 原田宗忠 2016 発達障害の可能性のある児童・生徒の入口支援時における教師の関わり—保護者との関わりに焦点をあてて— 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要第6号 印刷中

2 学会活動・各種研修会等

- 2015年5月23日 ITC家族心理研究センター主催研修会(名古屋市) 講師:三谷聖也/協力者:三谷理絵・板倉憲政・砂田紗季
- 2015年5月26日 豊明市教育委員会支援員対象研修会(豊明市) 講師:三谷聖也/協力者:小崎真
- 2015年6月9日 豊明市教育委員会支援員対象研修会(豊明市) 講師:三谷聖也/協力者:小崎真
- 2015年6月26日 富士松南小学校巡回相談①(刈谷市) 講師:岩田吉生
- 2015年7月3日 富士松南小学校巡回相談②(刈谷市) 講師:岩田吉生
- 2015年7月9日 愛知教育大学附属名古屋中学校心の健康推進連絡会 講師:原田宗忠
- 2015年7月10日 蒲郡子供サポート研究会—ITPAの実施と結果の解釈(蒲郡市) 講師:岩田吉生
- 2015年7月17日 日本家族心理学会第32回大会ワークショップ(山形市) 講師:布柴靖枝・三谷聖也
- 2015年7月17日 富士松南小学校巡回相談③(刈谷市) 講師:岩田吉生
- 2015年7月21日 愛知県総合教育センターでの通級指導担当者研修会(愛知郡東郷町) 講師:岩田吉生
- 2015年7月28日 愛知県総合教育センター教育相談講座(東郷町) 講師:三谷聖也/協力者:松原正明・牧野昌子
- 2015年7月31日 富士松南小学校巡回相談④(刈谷市) 講師:岩田吉生
- 2015年8月8日 日本ブリーフセラピー協会本部研修・ワークショップ(横浜市) 講師:三谷聖也
- 2015年8月8日-8月10日 NHK厚生文化事業団中部支局主催・やまびこキャンパー発達障害児の療育キャンプ(豊田市旭町 キャンプ長:岩田吉生/愛知教育大学学生・卒業生 50名)
- 2015年8月22日 名古屋・岐阜ライフデザイン支援合同研究会(高山市) 講師:板倉憲政・三谷聖也・

畦地真太郎・小林謙一・平井美津枝

- 2015年8月26日 名古屋市教育センターでの特別支援教育研修会（名古屋市） 講師：岩田吉生
- 2015年8月28日 名古屋市教育センターH27年度10年経験者研修会 講師：原田宗忠
- 2015年9月1日 四日市商業高等学校教員研修（四日市市） 講師：三谷聖也
- 2015年9月16日 富士松東小学校学級適応支援打ち合わせ（刈谷市） 講師：三谷聖也／協力者：本多祐子
- 2015年10月14日 富士松東小学校学級適応支援①（刈谷市） 講師：三谷聖也／協力者：白石梓・久國菜・佐藤理絵・林田美咲
- 2015年10月31日 愛知県立美術館—アートナビの参与観察（名古屋市） 研究チーム：小崎真・三谷聖也・久國菜・佐藤理絵・林田美咲
- 2015年11月4日 富士松東小学校学級適応支援②（刈谷市） 協力者：久國菜・佐藤理絵・林田美咲
- 2015年11月11日 富士松東小学校学級適応支援③（刈谷市） 協力者：久國菜・佐藤理絵・林田美咲
- 2015年11月14日 静岡県弁護士会子供の権利委員会主催講演会（静岡市） 講師：三谷聖也／協力者：原道也・三谷理絵
- 2015年11月19日 名古屋特別支援教育勉強会①（名古屋市） 講師：岩田吉生
- 2015年12月2日 富士松東小学校学級適応支援④（刈谷市） 講師：三谷聖也／協力者：白石梓・竹口沙綾・久國菜・佐藤理絵・林田美咲
- 2015年12月11日 愛知教育大学附属名古屋中学校心の健康推進連絡会 講師：原田宗忠
- 2015年12月17日 名古屋特別支援教育勉強会②（名古屋市） 講師：岩田吉生
- 2016年1月21日 名古屋特別支援教育勉強会③（名古屋市） 講師：岩田吉生
- 2016年2月18日 名古屋特別支援教育勉強会④（名古屋市） 講師：岩田吉生

3 その他の成果普及の取り組み

愛知県教育委員会特別支援教育課主催 「教育事務所特別支援教育担当主事等会議」

愛知県総合教育センター主催 「学級づくりに生かす教育相談講座」「組織で行う教育相談上級講座」「いじめ・不登校等の諸問題を考える教育相談講座」「高等学校10年経験者研修」

愛知県高等学校生徒指導研究会主催 「名南地区教育相談部会」「知多地区教育相談部会」「西三河南地区教育相談部会」「名北地区教育相談部会」「東三河高等学校生徒指導研究会（生徒指導部会・教育相談部会合同研究会）」

愛知県教育委員会高等学校教育課主催 「特別支援教育要請研修」「西東三河高等学校定時制・通信制特別支援コーディネーター研修会」「名北地区特別支援教育コーディネーター研修会」

城山教育研究会主催 「西三河A地区城山教育研究会」

豊山町主催 「豊山町養護教諭研修会」

刈谷東高等学校主催 「刈谷東高等学校現職研修」

今後の課題

実施計画では、1) 必修化に向けたニーズのリサーチ、2) 卒前修了前教育の実施、発達障害ライフデザイン支援プロジェクト、3) 発達障害入口支援、4) 医教連携、5) デザインのちから等のサブプロジェクトが実施され、平成26年度の同事業の研究成果のエッセンスを基に活用しながらテキスト開発およびその成果普及の取り組みがなされた。

まず必修化に向けたニーズ調査では、愛知県の教職員対象に大規模調査を行い、発達障害についての学びのニーズを把握し、エビデンスに基づいたテキスト編集がなされたことは大きな成果の一つであると言える。今後の課題は、普及したテキストによる教育効果の測定を試みることである。

次に卒前修了前教育については平成26年度に実施したが、今年度で2年目となり本学のイベントとして定着しつつある。必修化が達成されるまでの継続が課題と言える。

発達障害ライフデザイン支援プロジェクトに関しては、タテの連携を中心に研究会を実施し、講演内容をテキストに収録するなどの成果普及を試みた。今回の取り組みでいまだ連携が不十分であると思われる高大連携などの取り組みに課題があると言えるだろう。

発達障害入口支援については、昨年度は課題抽出にとどまったが今年度はそれを踏まえてガイドブックの開発を試みた。今後の課題は、活用の幅を広げるための成果普及の充実であると言える。

医教連携に関しては、学生向けに医教連携の共同研究会を実施し、またその成果報告会を実施するに至った。これを基盤に教員養成系大学である本学と医学系大学である藤田保健衛生大学との学生レベルでの交流などの活発化が課題であると言えるだろう。

最後にデザインのちからについては、視覚芸術とことばの循環運動についてきわめて意義のある知見を得ることができた。美術教育の特別支援教育へのますますの貢献可能性を模索することが課題と言えるだろう。

参考資料

1 開発テキスト一覧



発達障害のライフデザイン支援〔基本篇〕

推進委員（外部評価委員） 板倉憲政先生からの評価コメント

発達障害のライフデザイン支援〔基本編〕

本テキストは、疑似体験のワークなどを通じて、発達障害のある児童・生徒が問題行為を継続しているもっともな理由とはなんだろうかということを考えるきっかけを与えてくれます。また、本テキストでは、発達障害のある児童・生徒の特性を問題視するのではなく、彼らの世界観を体験しつつ、支援の方向性を探っていくアプローチを紹介しています。本テキストは、教職員やこれから教職員を目指す学生が学校現場でインクループ教育システムを構築していく上で必要不可欠な視点が盛り込まれている教材といえます。

推進委員（外部評価委員） 小崎真先生からの評価コメント

発達障害のライフデザイン支援〔連携支援編〕

発達障害に関する内容について、学校だけでは対応しきれない状況の今、本テキストは、「連携」をキーワードとして、「医療との連携」「幼保・小中・高大社の連携」等の重要性が具体的に整理されて紹介されている。

ぜひ多くの学校現場の先生方が、本テキストをとおして、発達に係る困り感のある子供への対応の参考にしていただけたらと思う。



発達障害のライフデザイン支援〔連携支援篇〕



発達障害のライフデザイン支援〔事例篇〕

**推進委員（外部評価委員）
板倉憲政先生からの評価コメント**

発達障害のライフデザイン支援〔事例編〕

本テキストでは、発達障害の支援に時間軸を加えた内容になっており、第一部では学校教育と子供の発達障害支援についての事例が紹介されており、第二部では医療福祉と大人の発達障害支援における事例が紹介されています。本テキストの内容は、発達障害のある子供が大人になっていく過程でどのような問題が生じるのか、そのためにどうすべきかなどについてそれぞれの領域から多面的に述べられています。本テキストは、教職員だけでなく、発達障害に関わる多くの対人援助職の方々にも有益な内容になっています。

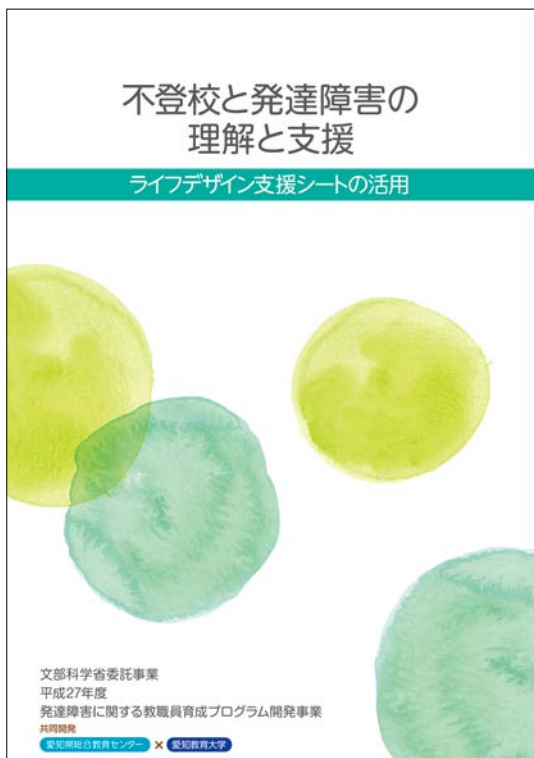


教職員のための発達障害 Q&A
— 教えてははじめ先生 —

**推進委員（外部評価委員）
板倉憲政先生からの評価コメント**

教職員のための発達障害Q&A—教えてははじめ先生—

本冊子は、発達障害支援において必要な知識をQ&A方式で対応していて大変分かりやすい内容になっています。「発達障害とは何か？」という基礎的な知識だけでなく、中1ギャップや大人の発達障害、さらには発達障害のある個人への働きかけだけでなく、個人を支える環境にも働きかけるノウハウなどを惜しみなく解説しています。本冊子は、日々現場においてご尽力されている教職員にとって、心強い教材となるといえます。

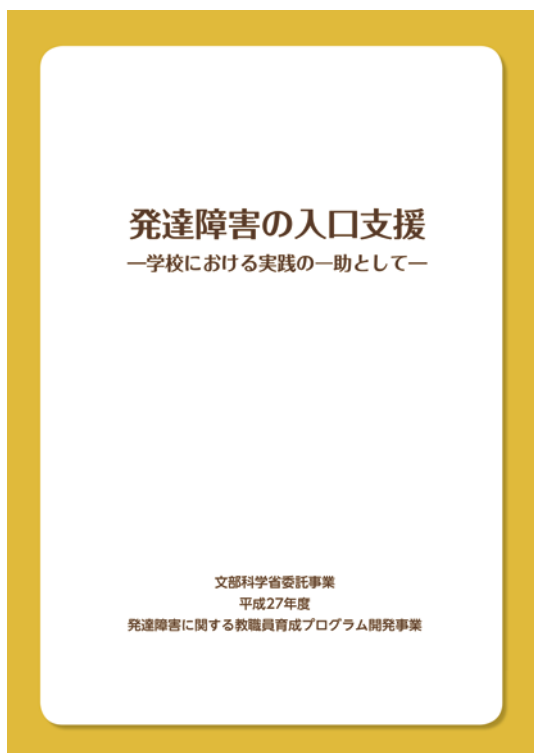


不登校と発達障害の理解と支援
—ライフデザイン支援シートの活用—

推進委員（外部評価委員）
板倉憲政先生からの評価コメント

不登校と発達障害の理解と支援—ライフデザイン支援シートの活用—

本冊子では、不登校と発達障害との関連について十分にまとめられており、かつ学校全体で子供支援に活用していくことができるライフデザイン支援シートが提示されています。本冊子を通して、発達障害のある子供を理解し、校内外の関係者と連携した支援を行っていくためのポイントを把握していくことができます。子供理解を深めたい、連携の必要性を感じているがどうすればよいかわからないという教職員にとって、本冊子は有益な教材となります。今後、ライフデザイン支援シートを活用した実践報告を期待しています。



発達障害の入口支援
—学校における実践の一助として—

推進委員（外部評価委員）
板倉憲政先生からの評価コメント

発達障害の入口支援—学校における実践の一助として—

本ガイドブックは、通常学級に所属している発達障害の傾向がうかがわれる児童生徒に対して、教職員や保護者がどのようなことに目を向ければよいかについて取りあげています。特に、支援の段階を3つのステージに分けながら、発達障害への対応を担任だけに押し付けるのではなく、いかにして校内、さらには保護者を踏まえた連携関係を構築し、支援を進めていくかについて触れている非常に実践的な教材になっています。

発達障害支援における タテの連携を考える

平成27年度
文部科学省委託事業発達障害に関する
教職員育成プログラム開発事業

【シンポジウムの趣旨】

- 途切れないひとつづきの発達障害支援はどのようにして可能かを考えます
- 幼小中高大のタテの連携における課題や取り組みについて各専門家からの話聴提供
- 小1プロブレム、中1ギャップの予防について考えます

場所 愛知教育大学・教育未来館3階・多目的ホール

対象 教職員・教育関係者・スクールカウンセラー

申込 FAX(申込締切:2015年7月31日(金))裏面参照

主催 国立大学法人愛知教育大学

後援 愛知県教育委員会(申請中)
名古屋市教育委員会(申請中)

8/2(日) 13:30~16:30

高岡睦美先生 愛知教育大学学校教育講座 講師
テーマ「小学校からのキャリア教育」

立松啓子先生 愛知県立瑞穂高校 教諭
テーマ「中高大連携の課題と取り組み」

松原正明先生 愛知総合教育センター相談部 教育相談研究室長
テーマ「ライフデザイン支援シートの開発と今後の展望」

板倉憲政先生 岐阜大学教育学部 助教
テーマ「小1プロブレムと中1ギャップへの予防的アプローチ」

コメンテーター
吉岡恒生先生 愛知教育大学障害児教育講座 教授

司会
三谷聡也先生 愛知教育大学教育臨床学講座 准教授

参加費 無料

お問い合わせ先:愛知教育大学 研究推進部研究連携プロジェクト管理担当
住所 〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢1 / 電話 0566-26-2417

「発達障害支援におけるタテの連携を考える」シンポジウム(2015年8月2日)

平成27年度文部科学省委託事業
発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業
(発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業)

「発達障害について学ぶー 発達障害の子どもの自己をどのように支えるかー」

日程 2015年8月23日(日)
13:00~17:00 [受付開始:12:30]

場所 豊川市勤労福祉会館 大研修ホール

学費 無料

申込み FAX[申込締切:2015年8月20日(木)]
※申込形式は要書

主催 愛知教育大学

後援 愛知県教育委員会
豊川市教育委員会(申請中)

趣旨

平成17年(2005年)に施行されました発達障害者支援法にて発達障害児・者やその家族への支援を行うことが明確化されて以来、学校現場においても発達障害および発達障害の可能性のある児童・生徒(いわゆる、グレーゾーン)の増加・増加傾向が顕著です。

愛知教育大学大学院教育学研究科は、平成27年度の文部科学省委託研究「発達障害の可能性のある児童・生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業」(発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業)に採択され、この採択研究のなかで、指導教員に対する発達障害の発見・支援を行っています。今回は、「発達障害について学ぶー発達障害の子どもの自己をどのように支えるかー」と題して、愛知教育大学より野口寿一先生をお招きし、発達障害の子どもの心と世界と、子どもの成長を支える姿勢について学ぶこととします。

「発達障害について学ぶー発達障害の子どもの自己をどのように支えるかー」プログラム

13:00 ● **開会・講演**
テーマ「発達障害について学ぶー発達障害の子どもの自己をどのように支えるかー」
○野口 寿一先生(京都大学教育学部 心理・発達臨床講座 講師)

14:15 ● **研究調査報告**
テーマ「発達障害の可能性のある児童・生徒への支援に関する調査報告」
○原田 宗忠(愛知教育大学 教育臨床学講座 講師)

(休憩 14:45 ~ 15:15)

15:15 ● **質疑・応答**

17:00 ● **閉会**

講師紹介 野口 寿一先生(京都大学教育学部 心理・発達臨床講座 講師)

大阪市出身。京都大学教育学部、京都大学大学院教育学研究科を経て、阪本病院に臨床心理士として勤務後、2013年より現職。教育学博士。臨床心理士。

専門は臨床心理学。他者との関係性を通して立ち現われてくる自己という観点から、現代の心のあり方や発達障害における心について研究を行っている。

「発達障害について学ぶー発達障害の子どもの自己をどのように支えるかー」講演会(2015年8月23日)

11月11日(木)
13:30~16:00
参加費 **無料**

プログラム
第一部:講演
第二部:グループディスカッション

教室で使える！発達障害入門
教育臨床カフェ特別企画

講師:飯塚一裕先生
(愛知教育大学障害児教育講座講師)

場所:愛知教育大学 多目的ホール
(教育実習館3階)

あなたの知らない臨床の世界

最近発達障害のある子どもの話題を耳にする機会が増えていますが、その多くは発達障害の言葉を用いて何を意味しますか？正しい知識を得て、子どもたちの様子を一緒に考えたい。そんな希望を叶えるためのチャンス！

本事業は、平成27年度「発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業」の一環で開催されます。
当日は簡単なアンケートにお答えいただくことがあります。ご了承ください。

「教育臨床カフェ」特別企画
「教室で使える！発達障害入門」(2015年11月11日)

平成27年度
文部科学省委託事業
発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業

研究会の主旨

- 迷切れないひとつづきの発達障害支援はどのようにして可能か考えます
- 発達障害児者の進学支援、就職支援、就労支援の実践について各専門家からの話題提供
- 発達障害児者の将来を見据えた在学中の支援は何かを考えます

場所:名古屋国際会議場 1号館 133・134会議室
対象:教職員・教育関係者・スクールカウンセラーほか
申込:FAX [申込締切:2015年11月25日(水)] 裏面参照
主催:愛知教育大学
後援:愛知県教育委員会
名古屋市教育局

平成27年
11/29(日) 13:30~16:30
(13:00開場)

総司会:三谷聖也先生
(愛知教育大学教育臨床学講座 准教授)

第一部:基調講演
「発達障害支援における高大社の連携
—特別支援教育の視点から」
講師:岩田吉生准教授
(愛知教育大学障害児教育講座 准教授)

第二部:実践報告

1. 「学生相談の実践」
講師:東北工業大学 ウェルネスセンター
臨床心理士 上西創先生
2. 「クリニックにおけるリワーク支援の実践」
講師:はしたクリニック
臨床心理士 古瀬直幸先生
3. 「障害者福祉の実践」
講師:社会福祉法人豊春会さいそら支援
サービス管理責任者 鹿野龍人先生

参加費 無料

※本研究会は発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業の一環で行われるため、研究終了後に開催を中止し開催に同意いたしません。予めご了承ください。
お問い合わせ先:愛知教育大学研究推進部研究連携課プロジェクト管理担当
住所:〒448-8542 愛知県刈谷市ササケ町1-1/電話0566-26-2417 / FAX0566-95-0012

「発達障害者支援におけるタテの連携を考えるⅡ—高大社の連携を中心に—」研究会 (2015年11月29日)

平成27年度文部科学省委託事業
発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業
(発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業)

卒業前・修了前教育としての 発達障害に関する 専門性向上研修会

参加料 無料

日時 12月5日 2015年
13:30～17:30 (受付開始/13:00)

場所 愛知教育大学・
本部棟3階・第一会議室

申込み 本学学生は学務ネットを御覧下さい。学外の方はお問い合わせ窓口まで
氏名(ふりがな)・所属先・連絡先がわかるよう記載したものをFAX下さい。

趣旨
現在、小中学校・高校では、通常の学級で学ぶ発達障害児の指導・支援の在り方が検討され、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を習得することが求められています。しかしながら、愛知教育大学の教育実践課程に関するカリキュラムでは、特別支援教育の講義が必修化されておらず、教職科目の一部で取り扱われる他、E選の選択科目として開講されているのみでの現状が伺われています。
そこで、来春3月に本学を卒業または修了する学生を対象として、発達障害に関する専門性を目的とした研修会を開催します。発達障害の概要を学ぶだけでなく、通常の学級での授業作りや教室の環境設備、現職教員の教育実践等、4月からの教育実践に役立つ知識を提供します。

プログラム

13:30～13:40 開会	・開会挨拶 ・趣旨説明 岩田吉生 (愛知教育大学 障害児教育講座 准教授)
13:40～15:20 研修1	「小中学校のユニバーサルデザインを目的とした学級作り」 神田正美先生 (愛知県総合教育センター・相談部 部長)
15:20～15:30 休憩	
15:30～16:00 研修2	「発達障害児の疑似体験」 岩田吉生 (愛知教育大学 障害児教育講座 准教授)
16:00～17:00 研修3	「小中学校の教員からのアドバイス ～通常の学級に在籍する発達障害児の支援と、特別支援学級の児童生徒との交流のヒント～」 月野真由美先生 (豊田市立南山小学校・教諭) 船田智子先生 (東海市立美穂中学校・教諭) 小林大輔先生 (名古屋市立長良中学校・教諭)
17:00～17:30 まとめ・閉会	・質疑・応答、全体のまとめ ・閉会挨拶

主 催 国立大学法人愛知教育大学
研究推進部研究推進プロジェクト管理担当 〒448-8542 愛知府岡崎市〒448-8541 TEL: 0566-26-2411 FAX: 0566-95-0012

「卒業前・修了前教育としての発達障害に関する専門性向上研修会」(2015年12月5日)

平成27年度文部科学省委託事業
発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援・教職員の専門性向上事業
(発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業)

教員養成大学の学生のための 医教連携による 「発達障害児者の医療」フォーラム

参加料 無料

日時 12月19日 2015年
13:00～17:00 (受付開始/12:30)

場所 愛知教育大学
第二共通棟1階・411

申込み 本学学生は学務ネットを御覧下さい。学外の方はお問い合わせ窓口まで
氏名(ふりがな)・所属先・連絡先がわかるよう記載したものをFAX下さい。

趣旨
現在、小中学校・高校では、通常の学級で学ぶ発達障害児の指導・支援の在り方が検討され、すべての教員が特別支援教育に関する一定の知識・技能を習得することが求められています。教員が学ぶべき領域は、特別支援教育に係る教育学や心理学の他、医学の知識も必要不可欠です。
そこで、すべての教員が発達障害に関する専門的・実証的な知識を有する教職員を育成するプログラムを開発するために、平成27年3月に藤田保健衛生大学と本学が協定を結び、連携して共同研究を進めております。
今回のフォーラムは「発達障害児者の医療」をテーマとして、藤田保健衛生大学の医師・臨床心理士の先生を講師として招き、発達障害児者の診断の実際、幼少期から青年期・成人期の経過、服薬の効果と管理の在り方について、将来、学校の教員となる本学の学生に、指導をいただきます。

フォーラムのプログラム

13:00 開会	開会の挨拶、趣旨説明
13:10 報告1	テーマ「小児科外来における発達障害児の診療の実際」 石原尚子先生 (藤田保健衛生大学病院・小児科・医師)
14:10～14:20 休憩	
14:20 報告2	テーマ「思春期・青年期の発達障害児者の医療」 江崎幸生先生 (藤田保健衛生大学病院・精神科・医師)
15:20～15:30 休憩	
15:30 報告3	テーマ「発達障害者に対する心理臨床」 北島智子先生 (藤田保健衛生大学病院・精神科・臨床心理士)
16:30 質疑・応答	コーディネーター 岩田吉生 (愛知教育大学 障害児教育講座 准教授)
17:00 閉会	開会の挨拶、事務連絡

主 催 国立大学法人愛知教育大学
研究推進部研究推進プロジェクト管理担当 〒448-8542 愛知府岡崎市〒448-8541 TEL: 0566-26-2411 FAX: 0566-95-0012

「教員養成大学の学生のための医教連携による『発達障害児者の医療』フォーラム」(2015年12月19日)

デザインのちからと特別支援教育

日時：平成 27 年 12 月 24 日（木）9:10～10:40

場所：愛知教育大学教育未来館3階講義室3B

講師：小崎真先生（豊明市教育委員会指導主事）

司会：三谷聖也（愛知教育大学准教授）



対象：本学学生・大学院生、教職員など

参加費：無料

事前申込先：研究連携課プロジェクト管理担当 梅村

umemuramans7@office.aichi-edu.ac.jp



参加者の皆様には研究会後に簡単なアンケートにご協力いただく場合がありますので予めご了承ください。

*本事業は平成 27 年度文部科学省発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業の一環で実施されます。

「デザインのちからと特別支援教育」研究会（2015年12月24日）

付 記

学内企画委員／学外推進委員／協力スタッフ一覧

学内企画委員（プロジェクトリーダー） | 三谷聖也 | 愛知教育大学教育臨床学講座准教授 |
| プロジェクト統括/テキスト編集長 |

学内企画委員（サブリーダー） | 岩田吉生 | 愛知教育大学障害児教育講座准教授 |
| 医教連携/卒前・修了前 |

学内企画委員 | 原田宗忠 | 愛知教育大学教育臨床学講座講師 | 入口支援 |

学内企画委員 | 吉岡恒生 | 愛知教育大学障害児教育講座教授 | 大学改革推進 |

学内企画委員 | 祖父江典人 | 愛知教育大学教育臨床総合センターセンター長 | 大学院改革推進 |

学内企画委員 | 廣瀬幸市 | 愛知教育大学教育臨床学講座准教授 | 大学院改革推進 |

学内企画委員 | 飯塚一裕 | 愛知教育大学障害児教育講座講師 | 教育臨床カフェ |

学内企画委員 | 川北 稔 | 愛知教育大学教職大学院准教授 | 教育臨床カフェ |

学内企画委員 | 三谷理絵 | 愛知教育大学学校教育講座非常勤講師 | テキスト編集 |

学外推進委員 | 松井俊和 | 藤田保健衛生大学学長補佐医師 |

学外推進委員 | 松原正明 | 愛知県総合教育センター相談部 |

学外推進委員 | 江崎幸生 | 藤田保健衛生大学病院精神科医師 | 医教連携 |

学外推進委員 | 石原尚子 | 藤田保健衛生大学病院小児科医師 | 医教連携 |

学外推進委員 | 北島智子 | 藤田保健衛生大学病院精神科臨床心理士 | 医教連携 |

学外推進委員 | 小崎 真 | 豊明市教育委員会指導主事・指導室長補佐 | 評価 |

学外推進委員 | 岡田悦子 | 豊川市教育委員会・指導主事 |

学外推進委員 | 布柴靖枝 | 文教大学教授、愛知教育大学教育非常勤講師 | テキスト監修・執筆 |

学外推進委員 | 上西 創 | 東北工業大学ウェルネスセンター臨床心理士 | テキスト編集・執筆 |

学外推進委員 | 板倉憲政 | 岐阜大学助教 | 評価 |

協力スタッフ | 酒井春佳 | 愛知教育大学心理教育相談室技術補佐員 | テキスト編集・執筆 |

協力スタッフ | 砂田紗季 | 名古屋大学医学部附属病院臨床心理士 | テキスト編集・執筆 |

協力スタッフ | 久國 栞 | 愛知教育大学大学院学校教育臨床専攻 |

協力スタッフ | 林田美咲 | 愛知教育大学大学院学校教育臨床専攻 |

協力スタッフ | 佐藤理絵 | 愛知教育大学大学院学校教育臨床専攻 |

協力スタッフ | 鬼頭裕一 | 愛知教育大学研究連携課 |

協力スタッフ | 本多祐子 | 愛知教育大学研究連携課研究補佐員 |

発達障害のライフデザイン支援成果報告書

発行 愛知教育大学

発行日 平成28年 3月22日

印刷 株式会社マルワ

平成27年度 文部科学省委託事業 発達障害に関する教職員育成プログラム開発事業